Y994-J2905
1200701567681

亞細亞研究叢

鼠と猫

文學博士
金澤庄三郎著

創元社

Y994-J2905

金澤庄三郎著

亞細亞研究叢書第一編

猫と鼠

創元社刊

Y994
J2905

『亞細亞研究叢書』刊行の辭

世界に孤立の民族もなければ文化もない、從つて人類の知識は世界的でなければならぬ。併し同一の事物も時と處の異なるに連れて、自からその風丰を同じくしない。「江南の橘を江北に移植すれば枳となる」と諺にもいふ通りであるから、東西兩洋の文化には各特質があり、兩々相對比して研究すればこそ、人智の向上があるのではないか。それ故我等東洋に國するものは、この點に於て特種の地位と責任を持つものといはねばならぬ。我國の文物が支那・印度に負ふ所重大であつて、その間に離し難い關係のあることは、物の優秀なるを「三國一」といふのでも分かる。これ等諸國の文明を日本化するに急なるの餘り、その眞摯なる學得研究を中道で放棄した過失は、已に平安朝に於て認められるが、明治維新後は歐米學藝の輸入に專らならざるを得ないため、更らにこの弊害を助長したことは、誰人

も拒むことの出來ない事實である。我國が今日の苦盃を嘗めざるを得ないのは、亞細亞特に支那の研究を怠つたことに重大な原因の潜んでゐることも、亦識者の等しくこれを認め、天を仰いで慨歎する所である。著者は齡已に古稀を過ぐること數歲、餘命幾許もない身ながらも、壯年の頃から東洋語學の研究に沒頭し來つた關係上、思ひを此方面に馳せる毎に、慷慨淋漓たるものがある。されば自隗始の意氣を以て、年來蓄積せる草稿を整頓し、『亞細亞研究叢書』として、逐次これを世に送らうと考へ、今まづ「猫と鼠」の短篇を公刊するに至つた。幸に若干の刺戟を我學界に與へ得るならば、著者の本懷これに過ぎたるものはない。

昭和二十一年仲春

相州金目鄉、濯足菴山莊

著者識

目次

猫に關する譬喩……一
猫の渡來は平安朝以後……二
猫は天子ノ妃の化する所……二
猫は手飼の虎……二
猫糞（ねこばば）といふ譬喩……二
猫に關する歐洲各國の譬喩……二
鼠に關する譬喩……三
拱鼠、禮鼠……三
頭の黑い鼠……三
白鼠……三
猫は來客を豫知す……三
まねき猫……三
蒙貴と猫……三
梵語猫の語原……三
ゲルマンの古俗に猫を豫言者とす……三
鴨長明と猫……四
命婦のおもと……四
猫に官名食俸あり……五
猫は熱帶の產……五
猫の鼻常に冷なり……五
貓と猫……五
貓は虎の一種……五
說文に貓なし……六
淺毛と虢苗と虢貓……六

目次

狻猊と師子と獅子……六
貓と錨……七
「いかり」の語原……七
鐵貓……七
貓以前の狸と鼬……七
狸の古訓ネコマ、メコマ、イタチ……七
本草の動植物名……八
メコマとネコマ……八
マカタチの語原……八
貓と狸……八
貓狸と鯨鼇……九
貓貍鼬の語原說……九
貓と貍と相通用す……九
鼬を鼠狼といふ……一一
鼬と鼬と牲……一一
鼬のラテン名の語原は鼠泥坊……一一
鼬に關する東西の迷信……一二
ネコマ、ネコ、コマ……一三
義仲と貓間中納言……一三
貓間ノ隨乘坊……一四
から貓……一四
ネコマの語原に關する諸說……一四
新井白石の說……一四
契沖・眞淵の說……一五
貓は其名を自から呼ぶといふ說……一五
貓の朝鮮名……一五
貓の高麗名……一六
貓の朝鮮方言……一六

目次

貓の對馬方言……一六
貓の蒙古名……一六
蒙貴……一六
暹羅產の蒙貴……一六
貓の擬聲語……一七
アホウ安房……一七
音訓雙擧……一八
文選讀……一八
華梵雙擧……一九
朝鮮に於ける漢字の音訓雙擧法……一九
我國の貓にシャム種多し……二〇
貓の西藏名……二〇
貓の梵語……二〇
北歐の野貓……二一
歐洲に於ける家貓の起原……二二
埃及に於ける貓の神格化……二二
貓の滿洲名……二三
＊　＊　＊
貓は埃及、鼠は亞細亞……二五
大己貴神と鼠……二五
鼠は象形字中に最も精密に實體を描寫せるもの……二五
西域の大鼠……二六
西域の鼠國……二六
螻蛄才……二七
碩鼠の二義……二七
鼠算……二七
鼠山野に滿つ……二八
鼠の種類……三〇

鼷鼠……三〇
甘口鼠……三〇
鼠の最小なるもの……三〇
廿日鼠……三一
廿日鼠の語原……三一
鼯鼠……三一
竹鼠……三一
家鼠と溝鼠……三二
直蛇横鼠……三二
つらねこ……三三
七郎ねずみ……三三
鼠妖……三三
火鼠……三四
鼠の原義……三四
鼠の唐名毛ジュウ……三四
耗蟲、耗子……三五
ねずみの語原……三五
新井白石説……三五
貝原益軒説……三五
梵語蒙古語いづれも鼠に盗の義あり……三六
鼠の朝鮮名……三七
鼠の女眞名……三七
鼠の滿洲名……三八
歐羅巴に於ける廿日鼠……三八
希臘羅馬時代の鼠害……三九
歐洲に於ける家鼠……三九
Ratus の語原……三九
歐洲に於ける溝鼠……四一

鼠創病……四二
鼠瘻……四二
鼠瘡……四二
鼠の名を人體の一部に應用す……四三

亞細亞研究叢書 第一篇

猫と鼠

文學博士 金澤庄三郎 著

猫と鼠

貪婪飽くことを知らない我等が廚房の大敵たる鼠族驅除の大任を果しながら、稍ともすれば猫ノ額、猫背、猫目、猫糞、猫撫聲、猫を被るなど、あまり芳ばしからぬ譬喩にのみ用ひられてゐるばかりか、心はねぢけまがりて、佛の御別れをも悲しまず、涅槃會の集ひにも姿を見せぬ不埒者とさへ罵られてゐるこの可憐なる家畜「猫」は、ただ平安朝以後とばかりで、いついづこより我國に渡來したものか、ネコといふその名はいづれの國語

猫に關する譬喩

猫の渡來は平安朝以後

であるか、これ等はすべていまだ不明である。

(1) 宋ノ羅大經の鶴林玉露巻十にいふ、唐武后斷ニ王后蕭妃之手足一、置於酒甕中一曰使ニ此二婢骨醉一、蕭妃臨死曰願武爲ニ鼠、吾爲ニ猫、生生世世扼ニ其喉一、亦可ニ悲矣、今俗聞相傳謂猫爲ニ天子妃一者蓋本ニ此也、予自ニ讀ニ唐史此段一、毎ニ見ニ猫得ニ鼠、未ニ嘗不ニ爲ニ之稱ニ快、人心之公憤有ニ千萬年而不一可ニ磨滅一者。槇島昭武の和漢音釋書言字考節用集巻五に猫傳云往古天子ノ妃所ニ化、事見ニ鶴林玉露一、又本朝女兒謂ニ之手飼ノ虎一とあるものこれなり。狸及び鼬も猫と同様の役割を演じたることは、後段に述ぶるが如くなれど、これ等は折にふれてのことと見るべく、猫の出現によりて、我等人類は始めて鼠害を根本的に防禦し得るに至れるものと知るべし。

猫は天子ノ妃の化する所

猫は手飼の虎

(2) この他にもなほ猫舌、猫斟酌、猫に小判、猫も杓子もなどあり。猫糞とは他人の遺失物を拾ひながら、知らぬ顔に我物とすることを、猫の糞をしながら、しかつめがほなるに譬へたるなり。支那にても、唐ノ李義府、外柔内險、時號ニ人猫一(正字通)などあり。舊唐書、李義府傳にいふ、與ニ人語一、必嬉怡微笑、而褊忌陰賊、故時人言ニ其笑中有一刀一。フランス語 chattemitte (猫を被る)、chatterie (諂ひ)、ドイツ語 Katzen-freundschaft (猫友情) なども同趣なり。これに反し、鼠は

猫糞といふ譬喩

猫に關する歐洲各國の譬喩

鼠窮狗盗、狐鼠進退、首鼠兩端など、よからぬ譬にも用ひられたれど、また拱鼠とて、人を見れば、其前足を交へて、拱するさまをなすにより、これを禮鼠ともいひ、詩、鄘風、相鼠篇には相鼠有ニ體一、人而無ニ儀一、人而無ニ止とさへ見えたり。我國にても、鼠を福神の使者といひ、また惡事を働きたる疑問の人物を「頭の黑い鼠」といふに對して、商家の番頭の忠義なるを「白鼠」といふ。大槻博士は鳴聲のチュウを「忠」の音に擬したるならんと(大言海)いはれたれど、チュウと鳴くは白き鼠のみにはあらず。抱朴子に鼠百歳則色白、善憑人而ト、名曰ニ仲一、能知ニ一年中吉凶一(正字通)とあるなど參照すべきか。但し猫にも一つ美點として擧げられたる所あり、そは猫その顔を拭うて耳を過せば客至るといふことにて、唐ノ段成式(字は柯古)の酉陽雜俎續篇八に俗言猫洗過ニ耳一則客至と見え、猫のチョッカイを揚げたるさま、即ち前片足を揚げたる姿の、恰も人を招くが如くなるより、國語にても招猫の稱あり。明ノ張燮の東西洋考巻一西洋列國考中の交趾の物産中、猫の原種と見做すべき「蒙貴」の條に狀如ニ猫而小、紫黑色一、畜ニ之捕ニ鼠甚於猫一といひ、次に内相家中蒙貴兒、華堂客到毎先知、今朝洗ニ面還過ニ耳の一詩を擧げたり。梵語 mārjāra (猫) は mārja (潔癖) と同根の語にて、絶えずその身を拭ふよりの名なり。ゲルマンの古俗にても猫は怜悧なる豫言者(kluge Zauberkun-

鼠に關する譬喩

拱鼠、禮鼠

頭の黑い鼠

白鼠

猫は來客を豫知す

まねき猫

蒙貴と猫

梵語猫の語原

ゲルマンの

古俗に猫を豫言者とす

dige Thiere) としてもてはやされたり。(Kulturpflanzen und Haustiere in ihrem Übergang aus Asien nach Griechenland und Italien sowie in das übrige Europa. Victor Hehn. Siebente Auflage. Berlin. 1902. S. 456)

(一) Mârjâra, a cat (prob. so called from its habit of constantly cleaning itself). Mârja, cleaning, a cleaner.

(A Sanskrit-English Dictionary. Sir M. Monier-Williams)

鴨長明と猫

(3) 鴨長明四季物語、宇治の寶藏山の御藏などの御繪のねはんぐゑをがみ奉るに云云佛の御國にも、ねこまといふけものは、かたちは虎によそひて、心はねぢけまがりたり、このねこまは佛の御わかれをもかなしう思はでこそ、ねはんぐゑの御まじへさへつかうまつらぬおどろ〳〵しさ、この國にともすれば、老たるねこま野らにすむなどは、人の子をうばひ、あるは人の妻をかどはかして、むくつけきものなり、さるを御前近う御ひざのうへにもおかせたまふことよ、ながきづなもひきいでつべきものならんかし。

命婦のおもと

(一) 枕草紙　うへにさぶらふ御猫は、(甲)かうぶり給はりて命婦のおもととて、いみじうをかしければ、かしづかせ給ふが云々　朝がれひの御前にうへはおはします、御覽じて、いみじうおどろかせ給ふ、ねこは御ふところに入れさせ給ひて云々。

猫に官名食俸あり

(甲) 澳門記畧下卷　又貓有肉翅、如蝙蝠能飛、宋太宗有桃花犬、明時大内貓犬皆有官名食俸此類是已。

猫は熱帶の產

猫が支那產のものでなく、その起原の熱帶地方にあることは、(1)彼等が寒を怖れ暑を愛するの一事を以てしても明らかである。

猫の鼻常に冷なり

(1) 酉陽雜俎續篇八猫其鼻端常冷、唯夏至一日煖。宋ノ羅願の爾雅翼に、猫性陰而畏寒、雖盛暑在日中不憚、鼻端四時冷濕、惟夏至卽溫。明ノ彭大翼の山堂肆考に、貓非中國之種、出西方天竺國、唯不受中國之氣所生、故鼻頭冷、唯夏至一日煖。「寒の雨が降れば、猫の顏が三尺になる」といふ俗諺も、雨日の溫煖にして、猫の喜ぶを形容したるものなり。

猫と猫

猫は貓の俗字であるが、今日いふ所のネコではなく虎の一種で毛の短いものの別名である。禮記、郊特牲に迎貓爲其食田鼠也、迎虎爲其食田豕也といひ、毛詩、大雅、韓奕の孔樂韓土、有熊有羆有貓有虎の毛傳に、

猫は虎の一種

説文に猫なし

貓似虎淺毛者也と見えてゐる。説文には「貓」字なく、虎部「虓」に虎竊毛謂之虓苗といひ、犬部「狻」には狻麑如虓苗、食虎豹者とあつて、いづれもこれを「苗」に作つてゐる。(1)(2)竊、虓。淺は通音で、(3)毛、苗も古音は相等しいから、虎の淺毛なるを虓苗と書し、虓苗を約言して、ただ苗とのみいひ、後に豸に从つて(4)貓字となしたものと見るべきであるから、貓は疑もなく虎の一種である。

淺毛と虓苗と虓貓

狻猊と師子と獅子

(1) 倭名鈔毛群部に兼名苑云師子一名狻猊酸蜺二音と見え、西藏語 seṅ-ge（獅子）の音譯、梵語にては simha、師子の「師」はその下略、「子」は漢人の加呼する所なり。

(2) 明ノ方以智の通雅 卷三十七凡言竊言盜、皆借色、淺色、間色也云々 爾雅、虎竊毛謂淺毛也、古人善巧煉字大率如此。魏ノ張揖の廣雅 卷五 竊淺也 注左傳正義云竊元ハ淺黑也、竊藍ハ淺青也、竊黃ハ淺黃也、竊丹ハ淺赤也、又爾雅、釋獸、虎竊毛謂之虓苗。

(3) 毛・苗相通ず、説文「虓」の段注、苗亦曰毛、如不毛之地。左傳昭七年、食土之毛誰非君ノ臣 注 毛ハ草也、史記卷四十二錫不毛之地 注 墝角不生五穀曰不毛。

(4) 錨の字は「貓」字より出づ。倭名鈔舟車部に四聲字苑云海中以石駐舟曰碇伊加利とあり、古は石を以て舟を駐む。イカリは石の異名イクリの轉にして、萬葉集には「重石」、播磨風土記には「沈石」を訓めり。後に至り、鐵製四爪のものを作りて、これを錨と稱す、貓の爪に擬したるなり。朝鮮崔世珍の訓蒙字會にいふ、漢人亦曰鐵貓。フランス語 chatte にも「牝貓」と「錨」の兩義あり。

貓と錨「いかり」の語原

鐵貓

貓以前の狸と鼬

然らば貓の出現以前に於ける鼠の征服者は何であつたかといふに、それは狸と鼬で、このことは獨り我國のみでなく、支那でも歐羅巴でも全く同じである。天治本新撰字鏡卷八 狸 力疑反、貓也、似虎少、禰古 本草和名下卷 家狸一名猫和名禰古 末、康賴本草（續羣書類聚 三十輯下）(1) 狸骨 味苦、溫、无毒、和禰己、又太々計、一名猫 類聚名義抄 佛下、本 (2) 狸 音釐 タヌキ、タヽケ、メコマ、イタチ 同書 佛下、末 狸 タヌキ、タヽケ、音釐、野猫 靈異記 訓釋 狸禰古、字鏡集 動物部 狸 理之反、イタチ、子コマ タヌキ など、古書に狸にイタチ又ネコの訓のあることは、この事實を裏書す

狸の古訓ネコマ、メコマ、イタチ

るものである。

本草の動植物名

(1) 大槻博士が大言海「たたけ」(狸)の條に家狸(ねこ)と混ず、注意すべしといひ、「ねこ」(猫)の條に「たたけ」(家狸)と混ずるは非なりといはれたるは、如何なる意か、訝しきことなり。

本草の書は、病を醫するを目的とすれば、所載の動植物名いづれもその心して見るべきなり、康賴本草に「狸骨」とあるは、骨を藥用とするがためにして、和訓は「狸」そのもののみに對して加へられたるなり。

メコマとネコマ

(2) 類聚名義抄にメコマとあるは、即ちネコマにして、ナ行マ行の通なり。字鏡集動物部 媒マカタチ ナカタチ とあるは、その顯著なる適例にして、侍婢、[侍者などの古訓マ、カタチはナカタチ(即ち媒介者)の轉ぜるもの、君主のため仲介の勞を取るものの義にして、これを前子(まへこたち)等の轉約とする說には從ひ難し。

マカタチの語原

「鼬のなき間の鼠」といふ諺、宇津保物語、國讓卷に見えたり。

猫と狸

塵囊鈔卷五に「狸ノ字をタヽケと訓む、又子コマとも訓む、ただネコと同じことなり云々 狸は猫なるべし、されば大日經疏(六十心の狸心の下に)(1)如猫狸と侍り、

明けし猫と狸との同類といふことぞ」とあり。

猫狸と鯨鼇

(1) 大治本一切經音義卷一 猫狸上又作貓字、亾朝亡包二反、下力其反、猫捕鼠也、貍狸也、又云野貍、倭言上尼古、下多々、既。

新撰字鏡に鼇背負甲蓬萊之山遊戲滄之中、久地良とあり。鼇の朝鮮訓は chara (자라) にして、kū (거) は大の義なれば、國語クヂラは朝鮮語より看ればこれを大鼇と解すべし、而して慧琳音義、不空羂索經第二十五卷に鯨鼇の二字を并擧して、上劇京反、海中大魚也、下音敖、王逸注楚辭云大龜也とあれば、猫狸と鯨鼇と各同類たること想ふべきなり。

猫、貍、鼬の語原說

支那でも貍と鼬とは貓と共通して用ひられてゐる。貓は宋ノ陸佃の埤雅卷四に鼠善害苗、而貓能捕鼠去苗之害、故貓之字从苗といひ、貍については豸在里者、里ハ人所居也、貍穴而薶焉、故貍又通於薶字と見え、鼬は明ノ李時珍の本草綱目 卷五十一 に其色黃赤如柚故名と、それ〴〵語原說を述べてゐるが、廣雅釋獸 貍ハ貓也、廣韵上平 貍野猫、貍俗、爾雅翼、貓其色有似貍者通謂之

猫と貍と相通用す

貍ニ本草綱目、貍如レ猫而圓頭大尾者爲ニ貓貍（俗にマメダヌキといふもの）、明ノ張自烈の正字通、貓一曰ニ家貍など、貓と貍と相通用するばかりでなく、古諺に騏驥驊騮捕ニ鼠於深宮之中ニ曾不レ如ニ跛貓と、鼠を捕ふる猫の殊技を稱するに對しても、莊子秋水篇騏驥驊騮一日而馳ニ千里捕鼠不如ニ貍牲韓非子揚權篇使ニ雞司レ夜、令貍執レ鼠、皆用ニ其能ニ上乃無レ事（漢ノ桓寛ノ鹽鐵論除狹篇の明ノ張之象の注には、これを引いて、貍を猫に作る）、漢ノ劉向の說苑に騏驥驊騮倚衡負レ軛、一日千里、此至疾也、然使捕レ鼠曾不如ニ百錢之貍など、いづれも猫に代へるに貍を以てし、埤雅卷十一鼠の條には傳曰窮鼠齧レ貍と、これも貍としてゐる。

塊囊鈔卷五帝範の審官篇に云ふ、捕レ鼠狸不レ可レ使ニ之搏レ獸と云へり、是賢愚大小器異なることを狸の鼠を得てとれればとて、自餘の獸を不レ可レ搏に喩へたり、可レ知猫也といふことを。

鼬を鼠狼といふ

廣雅に鼠狼、鼬とあるは、善く鼠を捕ふる故の名で、太平記卷五には、承塵（なげし）の方より其色朱を差したる如くなる鼠狼（いたち）一つ走り出で、この鳩を二つながら食殺してぞ失せにけると見えてゐる。高麗の俗、鼬鼠を黃鼠狼と呼び、又騷鼠と名づけ、その尾を以て筆を作る（盛京通志）。爾雅釋獸鼬鼠の晉ノ郭璞注に今鼬似レ鼫、赤黃色、大尾啖レ鼠、江東呼爲鼬とあるのを、倭名鈔には爾雅集注云鼬鼠（上音酉）狀如レ鼠赤黃而大尾、能食レ鼠、今江東爲レ鼬（音性以太知漢語抄云鼠狼）と見え、一は似鼫といひ、一は如鼠とする差があるのみで、一名を鼬といふ點では一致してゐる。上記莊子秋水篇の不レ如ニ貍牲の牲は鼬の音通である。

鼬と鼬と牲

希臘羅馬の古代に於ても、猫の出現以前に鼬鼠（いたち）がその鼠族退治の任務を代行したことは、東洋に於けると全く同樣であつて、Weasel（鼬）のラテン名[1] mustéla の語原は「鼠泥坊」の義である。猫のラテン名[2] felis も實は鼬（いた）

鼬のラテン名の語原は鼠泥坊

鼠、鼬、狸、野猫の通名で、今日いふ家猫ではない。

(1) Reallexikon der Indogermanischen Altertumskunde. O. Schrader. Strassburg 1901 S. 956

(2) V. Hehn, Kulturpflanzen und Haustiere. S. 456

されば Wiesel（鼬）は可憐なる小獸として親しまれ、Mühmlein（伯母ちゃん）、Jüngferchen（姉ちゃん）、Bräutlein（お嫁ちゃん）などの愛撫語を以て呼ばるゝ一方、その突然の出現又は同一箇所にて屢際會することを惡兆として忌み嫌ふの風習あるは、我國に於て「鼬みめよし」の呪語を以て、そのまかげさす容姿を敬遠し、或は「鼬のみちきり」とて、その通路を横斷すれば、知己との交情打ち絶ゆとてこれを忌み、或は鼬の集まりて啼くを不祥の兆とするなどと相似たりといふべし。

鼬に關する東西の迷信

（Mythologie der Germanen. Elardo Hugo Meyer. Strassburg 1903 S. 80）

ネコマ、ネコ、コマ

然らば、東洋に於けるネコ（猫）の傳來と、その名稱の起原に關する所見は如何にといふに、まづ猫は古くこれを[1]ネコマと呼んだから、ネコはその下略と見るべく、枕草紙翁丸の段にはコマ〳〵ともあれば、その上略の形も用ひられたのである。鼠を[2]ネコ（鼲鼲など）と呼ぶことがあるから、これと分つためにも、ネコマと名づけた方が便利だつたに違ひない。

(1) 倭名鈔毛群部 猫、野王案猫音苗、古麻、禰似虎而小、能捕鼠爲粮

(2) 契沖、圓珠庵雜記、鼠の類にツラネコといふあれば、ネコとのみいふは、略語の中にことわり背くべし。

義仲と猫間中納言

木曾義仲が、歌人として有名な藤原家隆の父猫間の中納言光隆の訪問を受けた時、「抑〻猫殿とは鼠取る猫か、人を猫殿と申すか」と訝り尋ねたことは有名な笑話であるが、地名二字の制であるとはいへ、猫間と書く以上、猫の一字はこれをネコと訓んだに相違なく、同時に猫をネコマと呼んだこともまた明らかな事實である。

平家物語長門本卷十五根井といふもの、木曾に猫殿の參りてこそ候へと、仰せられ候へといひければ云々　七條坊城壬生の邊をば南猫間と申候、これは北猫間に渡ら

せ給ひ候上萬の、猫間の中納言殿と申參らせ候人にて渡らせ給ひ候なり、鼠取候猫にては候はぬなりと、こま〳〵と云ひたりければ云々

猫間ノ隨乘坊

猫間は山城國葛野郡の地名、壬生の南、六條の北をいふ、藤原光隆この地に住し、その家を猫間とも壬生とも稱せり。

沙石集巻六十にも「洛陽に猫間の隨乘坊の上人と聞えしは、度宋して徑山の佛法をとぶらひ、達磨の宗風を學びて、たとき禪師なりけり」などあり。

かくて、猫の古名ネコマの語原に關する從來の諸説を通覽するに、源氏物語若菜にから猫のいと小さくをかしげなるとあるやうに、もと韓國から渡來したものであるから、寐高麗の義とする説（大言海）、また寢る習性あれば、寐子といひ、マは助語で、音魔に通じるから、これを略すと説くもあるが、新井白石はその東雅に「ネとは鼠なり、コマといひ、クマといふは轉語なり、鼠の畏るる所なるをいひしなり、カミといひし語轉じてクマともいひけり、石見・淡路などの郷名クマシネに神稻の字を用ふるなど見えしが如き、なほ幸に古の遺言の後に傳はれるなり」と論じてゐる。その他に、契沖は鼠子待の略（圓珠庵雜記）といひ、眞淵は圓珠庵雜記の頭注に、例の反切延約を連用して、「睡獸の略なるべし、ケモノの反コなり、或人苗の字につきて、ナヘケモノかといへるはわろし」といつてゐるが、苗獸の説は前述の宋ノ陸佃埤雅の説、貓能捕鼠、去苗之害、故貓之字、从苗に基いたものである。また倭名鈔の猫似虎而小とあるなどより、如虎の字を充てるなどもある（書言字考節用集）が、本草綱目巻五十一貓、苗茅二音、其名ヲ自ラ呼フの説と同樣に、ねうゝと鳴くけものなりとする説（兎園小説）が、最も眞に近いものと考へられる。

契沖・眞淵の説

猫は其名を自から呼ぶといふ説

(1) 源氏物語若菜下ねうゝといとらうたげに鳴けば、かきなでつつ云々。

猫の朝鮮名

朝鮮語で猫を괴(1)(koi)といふ。高麗史にも方言呼猫曰高伊と見え、今日

猫の高麗名

と同様であつたのであるが、宋ノ孫穆の雞林類事の高麗方言の中には猫曰鬼尼（귀니 kui-ni）とあり、今日の朝鮮方言中にも kona と呼ぶ地方もあり、我對馬方言にも猫をカナといふから、koi の語尾に ni, na を添へた稱呼もまた古いものといはねばならぬ。蒙古語では猫を[2]みぐい（migui）といふが、これは支那で昔から猫の一名とする[3]蒙貴（méng-kuei）から出たものと思はれるが、私はこの蒙貴こそ我國語ネコの語原と見るべきものであらうと考へる。

猫の朝鮮方言

猫の對馬方言

猫の蒙古名

蒙貴

(1) 訓蒙字會 上卷 貓 고양 묘 音毛

(2) 清文鑑卷三十貓 ᠮᡳᡤᡠᡳ 密觚伊烏伊

(3) 酉陽雜俎續集八 猫一名蒙貴

通雅 卷四十六に獠猫有黑白黃者、暹羅最良、捕鼠百捷于家貓といひ、明ノ張燮の東西洋考 卷一 西洋列國考中、交阯の物産中に、蒙貴狀如猫而小、紫黑色、畜之捕鼠甚於猫とあるから、もと南方の産であることが分かる。この蒙貴も、それから轉じたみぐいも、この動物の鳴聲に擬した語であつて、猫の支那音 mao、ドイツ語猫の愛稱（Kosename）Mieze、猫のイタリア語 micio、スペイン語 miza、古代フランス語 mite などに比すべきものであるから、國語ネコマのネコ（特に類聚名義抄のメコマのメコ）はこの蒙古語 migui から轉じた猫の鳴聲の擬聲語（Onomatopöie）と見るべきである。然らば、ネコマのマは何であらうか。

通雅

暹羅産の蒙貴

猫の擬聲語

「アホウ安房」といふ諺がある。安房（あは）といふ國は阿波（あは）の齋部の移住した地であるが、この四國の阿波と房總の安房とを分たんがために出來たこの標語は、安房（アハウ）の音を秦ノ始皇の阿房（アハウ）宮に寄せて、癡愚の意としたものである。

アホウ安房

「え」と「ゑ」とを「もと（元）のえ」「すゑ（末）のゑ」と分かつなども、皆同音異義の語を區別するために採られた手段に外ならぬ。「くろ玄」、「もと元」、「みなもと源」、また「はた秦」、「すすむ晉」、「かね金山」、「こみち徑山」（金山、徑山は支那の寺名、「金」「徑」の宋音はいづれもキン）などは、

音訓雙擧

音訓雙擧の方法で同じ目的を達したもので、「さい際」、「時節じせつ」、「片時へんし」、「日にち毎日」、「狹布の狹布」（陸奥より貢進の幅狹き調布）など、一度は音に、一度は訓に讀ませたものを、俗に文選讀といふ。

文選讀

宋の仁宗と神宗とを區別するため、仁義仁宗、神神宗といふなどもあり。後には唐の唐人が馬から落ちて落馬したなど、音訓を重ねて呼ぶことを謗るに至つた。

平家物語 福原落　袖に宿かる月の影、千草にすだく蟋蟀のきりぎりす。

華梵雙擧

徒然草 百六十段 護摩たく 注「梵語の護摩は漢語に「たく」といふ心なればきらふ也、されども梵語と漢語と二つ重ねて呼べる多し、これを華梵雙擧とも唐梵重標ともいふ、佛書にその例數多侍り」とあり。護摩は梵語 Homa、大日疏に護摩是燒義也とあるこれなり。懺悔の如きも懺は梵語 ksamayati の略、金光明經文句記三、懺悔二字乃雙擧二音、梵語懺摩、華言悔過。

朝鮮に於ける漢字の音訓雙擧法

朝鮮では、今日もなほ昔のやうに、音訓雙擧の法を用ひて、漢字の音を學習してゐる。水の音をただスヰとのみいはず、朝鮮訓 물（mur）を先づ擧げて、물슈（mur-syu）といひ、火の音をただクヮとのみいはず、朝鮮訓 불（pur）を加へて、불화（pur-hoa）といふ。總ての漢字盡くさうである。故に猫の場合に於ても、その古訓メコ（蒙古語 migui から推していふ）と猫の正音 묘（mo）とを併せ唱へて、メコモと呼んだことは當然であつて、毫も疑ふべき餘地がない。この古稱メコモから轉じたネコマが我國の古典に保

存せられ、朝鮮ではメコの上略 괴(koi)となり、今日でも猫の字はこれを 괴묘(koi-mo) 卽ちコマと呼んでゐるのである。

ネコに猫の字を充ててゐるが、これは虎の一種であつて、ネコといふ獸名は南方から來た蒙貴といふ動物とすべきであることは、上述の通りであるが、この蒙貴の起原については、ただそれが鳴聲に擬した語だといふ以外に、何等の手懸もない。我國の猫にはシャム種の短毛のもの最も多く知られてゐるが、[1]西藏では猫に對する固有語なく、[2]ペルシア語 pi-ši を借用してゐる程であるから、その知識は比較的新しいものといはねばならぬ。梵語では猫を mârjâra とも [3]sitara ともいふが、鼠の征服者として知られたのは、あまり舊くはないといふ。

我國の猫にシャム種多し

猫の西藏名

猫の梵語

(1) Über einige Tiernamen. W. Schott. Berlin 1876

(2) Pi-ši (perhaps from the Persian) cat, Western Tibet.—A Tibetan-English dictionary. H. A. Jäschke. Herrnhut 1881.

(3) 猫の名は歐洲の東部并に東南部にては lit. puizė, alb. piso、イラン語族にては np. pušek, kurd. pišik, afgh. pišō などにて、これ等はいづれも梵語 puccha (尾)より出でたるものなりといふ。

梵語雜名　猫指吒羅(シタラ)ねこ

〈ーンは猫の梵語を vidâla なりとせり。恐らくは非ならん。(Hehn, Kulturpflanzen. S. 609)

猫以前に鼬が鼠族の征服者であつたことは、既に述べた通りであるが、北歐に於ては、神話時代から、これと併行して野猫の存在したことは確實である。[1]ゲルマン族の古代に、光明の神としてその父ニョルト(Njörd)と共に特種の地位を保つてゐたフライ(Frey)の妹である愛の女神フライヤ(Freyja)は、二匹の猫に引かれた車に乘つて出現すると言ひ傳へられ、グ

北歐の野猫

リム（Grimm）は猫が鼬と共に未來を豫知する怜悧性を有するがため、愛撫せられたといつてゐる。かくて、書契時代に、犬鷄と共に家猫が農家に養はれて、鼠族を征壓するに至るより以前に、野猫（Wildkatze）、山猫（Luchse）が車輛牽引の用に供せられたと信ぜられるのである。[2]

(1) E. H. Meyer, Mythologie der Germanen. S. 362
(2) Waldbäume und Kulturpflanzen im germanischen Altertum. Johannes Hoops. Strassburg 1905. S. 18

歐洲に於ける家猫の起原

而して歐羅巴に於ける家猫の起原は實に埃及にあつて、[1] 最初狩獵のため野猫を馴養したものであるが、これはナイル河上流地方の土民が努力の結果で、埃及人のこれを繼承して、數世紀に亙る勞苦の末、終に從順なる家畜と化したものである。猫は埃及に於ては神格化せられ、不可侵の聖位を與へられてゐた。羅馬の全盛時代ですら、プトレメーウス（Ptolemäus）王の權勢を以てしても、過つて猫を害した一羅馬人の生命を埃及人の手から救ふことが出來なかつたといふ程である。この埃及猫は catus の通名を以て、西羅馬帝國を經て、イタリアから歐洲諸國のみでなく、遠く東の方亞細亞方面にまで分布したのである。併しながら、このラテン名 catus と同系に屬する英語 cat、ドイツ語 Katze、フランス語 chat、ロシア語 KOTЪ、アラビア語 qitt、トルコ語 kedi の起原幷にその分布の歴史はいまだ不明であるが、始め北歐語より出でて、野猫の名であつたらしい。[2]

埃及に於ける猫の神格化

(1) Hehn, Kulturpflanzen. S. 466
(2) An etymological dictionary of the English language. Rev. Walter W. Skeat. 3rd. edition, Oxford. 1898

猫の滿洲名

玆に吾人の最も意外とすることは、[1] 滿洲語のᡴᡳᡧᡳᡴᡝ（猫 kesike）とロシア語 koшka の一致である。これが偶然の暗合であるか、又は東西相隔せ

る兩語間に連絡するところあるか。將來の研究に俟たねばならぬ。(2) 山海經に貍の如き獸なりとする「類」を、滿洲語でケシケン (kesiken) といふが、貓と貍とは關係があり、また猫脚菜をケシケファサンシ (kesike fatha「猫の脚」の義) といふなどから考へて見て、この語があながち近世の外來語とのみ斷じ去ることも出來ないであらう。

(1) 清文鑑 卷三十貓ケシケ 珂西珂 額伊額

(2) 山海經、亶爰之山有獸焉、其狀如貍而有髦、其名曰類、自爲牝牡、食者不妒。

* * *

猫は埃及、鼠は亞細亞

猫が埃及を故國として、歐羅巴各國幷に東の方亞細亞諸邦に傳播したと正反對に、鼠は亞細亞に發生して、西の方歐洲に波及し、更に海を越えて亞米利加にまで進出してゐるのである。我國に神代から鼠の生存してゐたことは、大己貴神が燒野の中で、鼠の敎のままに、洞窟に身を潛めて、火難を免れたまうた神話でも明らかである。

大己貴神と鼠

古事記神代八之卷 亦鳴鏑射入大野之中、令採其矢、故入其野時、卽以火廻燒其野、於是不知所出之間、鼠來云、內者富良富良、外者須夫須夫、如此言故、蹈其處者、落隱入之間、火者燒過、爾其鼠咋持其鳴鏑出來而奉也。

鼠は象形字中に最も精密に實體を描寫せるもの

鼠はその形兎に似て小さく、青黑色、四齒あつて、牙無し、長鬚露眼、前爪は四、後爪は五、尾文織るが如くにして、毛無く、長さはその身と等しい(本草綱目卷五十一)。鼠は首の大きさ幾んどその身の如く、腹大に、足短く、その行くや、卑伏して、尾を曳く。鼠の字形は上記の趣きに象り、巳は頭と

門歯上下各二枚、鼠は腹と爪と尾で、象形文字の中でもその實體を最も精細に寫してゐるのを見ると、多くの注意がこの動物に拂はれたことが窺はれるのである。

西域の大鼠

毛詩國風、魏に碩鼠篇があり、その君重斂して民を蠶食し、政を脩めず、貪つて人を畏るゝこと大鼠の若きを刺つたものであるが、西域諸國には大鼠に關する記錄が多い。唐、玄奘の大唐西域記に鼠壤墳のことを述べていふ。

聞之土俗曰此沙磧中鼠大如蝟、其毛則金銀異色、爲其群之首長、每出穴遊止、則群鼠爲從、昔者匈奴率數十萬衆寇掠邊城、至鼠墳側屯軍、云々

西域の鼠國

諸馬鞍、人服、弓弦、甲縅、凡厥帶糸、鼠皆齧斷。梁ノ任昉の述異記（巻下）に、

西域有鼠國、大者如狗、中者如兎、小者如常鼠、頭悉白、商賈經過其地、不祈祀則齧人衣（正字通）とある。

(1) 毛詩國風、魏碩鼠碩鼠無食我黍、三歲貫女莫我肯顧、逝將去女適彼樂土。

說文鼫を五技鼠と訓ず、又碩鼠に作る。倭名鈔に螻蛄一名碩鼠、和名介良、有五能、而不成伎術、能飛不能過屋、能啼不能轉聲、能泅不能渡瀆、能緣不能窮木、能耕不能掩身、喻於人之短藝、見蔣魴切韵とあり。國語にて、多藝なれど、いづれも精しからざるを螻蛄才といふはこれによる。

螻蛄才

碩鼠の二義

黑川春村に碩鼠漫筆の著あり、門生等相語りて、さすがに吾師なれば、同じ鼠にても大鼠と號したまへりと評せるを、春村の聞きて、碩鼠に二義あることを諭せりといふ。事を成し遂げず、中道にて廢することを、諺に「螻蛄の水渡り」といふ。

鼠算

我國の算術書として著名なる吉田光由の塵劫記に「ねずみざん」と題し、正月に鼠父母子を十二匹生む、親と共に十四匹なり、二月に親も子も子十二匹を生む、故に九十八匹となる、十二月には二百七十六億八千二百五十七萬四千四百二匹とあるやうに、鼠の生殖率には驚くべきものがある。鼠の生命は凡そ三年、生後三ヶ月より繁殖を始め、約二ヶ年間は最も旺盛な

りといふから、西洋の學者の計算によるも、假りに生後六ケ月に最初の分娩あり、年四回毎回八頭とすれば、三ケ年後には、二十五萬三千七百六十二頭となるのである。杜環經行記に拔汗那國、東隔山疎勒二十餘里、有野鼠山野に滿つ、遍滿山谷。（文獻通考卷三百三十七、四裔考、疎勒ノ條）と見え、我國でも續日本紀、三代實錄に次のやうな記事がある。

寶龜六年、秋七月丁未、下野國言、都賀郡有黑鼠數百計、食草木之根數十里所。（續紀卅三）

貞觀十七年、六月十三日甲子、比日每夜有鼠跡無方數、滿兩京路、或自北向南、或入宮城、或出城外。（三代實錄二十七）

源平盛衰記に、(1)賴豪の死靈大鼠となりて、谷々坊々に充滿せることを記し、(2)著聞集にも伊豫の黑島に、鼠の滿ちくて、海底にまで及んでゐることを述べてゐる。

(1) 賴豪が死靈大鼠と成り、谷々坊々充滿て、聖教をぞかぶり食ひける、是は賴豪が怨靈なりとて、上下是彼にて打殺蹈殺しけれども、彌鼠多く出で來て、夥しなんど云ふ計りなし、此事只事に非ず、可宥怨靈とて、鼠の寶倉を造て、神と奉祝、さてこそ鼠も鎭りけれ。（源平盛衰記卷十）

(2) 安貞の比、伊豫國矢野ノ保のうちに、黑島といふ島あり、人里より一里ばかり離れたる所なり、かしこにかづらはざまの大工といふあみ人あり、魚をひかんとて、うかがひありきけるに、魚のあるところより、光りて見ゆるに、かの島のほとりの磯ごとに、おびただしく光りければ、喜びて網をおろして引きたりけるに、つやくとなりて、そこばくの鼠を引上げて侍りけり、その鼠引上げられて、皆々散りくににげうせにけり、大工あきれてぞありける、ふしぎのことなり、すべてかの島には鼠みちくして、畠ノ物などをもみなくひうしなひて、當時までもえつくり侍らぬとかや、くがにこそあらめ、海のそこまで鼠の侍らんこと、まことに不思議にこそ侍れ。（著聞集二十）

鼠の種類

鼠には、また種類が多い。爾雅には鼠の屬凡十三種を載せてゐ、說文には鼠ハ穴蟲之總名也とあり、倭名鈔にも四聲字苑を引いて、鼠穴居小獸、種類多者也とあるが、我國產には少くとも九屬四十餘種を數へるといはれてゐる。その中には、上に述べたやうな大鼠もあれば、また(1)鼷鼠一に耳鼠ともいひ、(2)鼠の最小なるもの(博物志)で、極めて細いが、その螫毒は人及鳥獸を食うてもこれがために痛みを感じないといふので、甘口鼠の別稱のあるものがある。(3)左傳に鼷鼠食郊牛角とあるのがそれである。

鼷鼠

甘口鼠

(1) 倭名鈔　說文云鼷鼠音奚、阿末久知禰須美、小鼠也、食人及鳥獸、雖至盡不痛、今謂之甘口鼠。

鼠の最小なるもの

(2) 爾雅釋獸鼷鼠注有螫毒者、疏鼷鼠、郭云有螫毒者、蓋如今鼠狼、春秋成七年、食郊牛角者是也、博物志云鼠之最小者、或謂之耳鼠。說文段注、鼷、小鼠也、何休公羊傳注云、鼷鼠鼠中之微者、玉篇云有螫毒、食人及鳥獸皆不痛、今之甘口鼠也。

(3) 左傳　成公七年、春王正月、鼷鼠食郊牛角、改卜牛、鼷鼠又食其角。

甘日鼠

これは今俗甘日鼠(はつかねずみ)といふものであるが、甘日鼠の語義については、今までまだ適說がない。大槻博士が僅鼠(はつか)ならむ、或は常鼠の生れて甘日ばかりの大きさの義ならむ(言海)とせられたのには、いづれも首肯し難い。愚按によれば、甘の下一畫を除けば甘となり、またその一畫を口の上に加へると、その形が日の字に近い。我國で甘口鼠の原義に疏いものの濫りに揑造した名稱であると考へるが、是非の評は讀者の判斷に俟つ外はない。禮鼠一に拱鼠といふ一種については、已に前に述べたが、鼫鼠もまた能く人の如く立ち、前兩足を交へて舞ふ。

甘日鼠の語原

鼫鼠

埤雅卷十一　鼫鼠兎首、似鼠而大、能人立、交前兩足而舞、害稼者、一名雀鼠、廣雅云

鼯鼠鼯鼠是也。

竹鼠

竹鼠といふ一種は、鼠に似て大きさ兎の如く、土中に穴居して、竹根を食ふ。故に竹鼠といふ。四川省に産し、その肉は味鴨の如く、羊を煮るに鼈と共にすれば、火を省き、熟し易しともいふ。蒙古語でもこれを[illegible]の[illegible]（hulusun no hulugana 竹の鼠）と名づけてゐる。

家鼠と溝鼠

家鼠（いへねずみ）（Hausratte—mus rattus）は能く攀ぢ、土中を潛（もぐ）ることなく、水に泳がず、溝鼠（どぶねずみ）（Wanderratte—mus decumanus）はこれに反して、群をなして移動し、地下に穴を穿ちて潛行し、また能く水に入りて泳ぐ。俗に直蛇横鼠といつて、蛇は好んで水流に順つて進み、鼠は流れを横ぎつて渡る。倭名鈔に玉篇云鼯鼯（鼯離二音、和名豆良禰古）小鼠相銜而行也とあるのは鼯鼯の誤倒であつて、本草啓蒙巻四に「小鼠尾を啣み、多く連行し、或は遠所に移り行く、

直蛇横鼠

つらねこ

七郎ねずみ

鼠妖

肥前島原には、菜花（なたね）の時、黒色の鼠數多く尾につき行くこと菜圃中にあり、少きものは七八、多きものは二三歩相連なる、方言七郎ねずみ」とあるのが、それで、支那では數萬の大群をなすものがあり、これを鼠妖と名づけてゐる。

元ノ順宗至正乙未年、江淮間羣鼠擁集如山、尾尾相銜度江、過江東、來湖廣、羣鼠數十萬、度洞庭湖、望四川而去、夜行晝伏、路皆成蹊、不依人行正道、皆遵道側、其羸弱者走而不及、多道斃（草木子）。明ノ武宗嘉靖時、有羣鼠行渡、神宗萬曆戊午己未江北有方鼠千萬銜尾、渡江南、蘆麥盡爲所咋、其鼠頭方尾毛、熹宗天啓時、田鼠糾結如桴薇、入蘆葦、根苗立盡、張養默言、短尾方喙、小於鼠、而足長、毅宗崇禎壬午鼠銜尾渡江。（物理小識）

朝鮮の童謡にも、凶作の歳、鼠の大群尾を銜んで鴨綠江を渡り、支那より來れることを言傳へたり。

鼠の多數に移動せしことは、我國の史籍にも見え、天智天皇五年紀、是ノ冬京都之鼠向（むき）ニ近江ニ移ル、扶桑略記、巻四 孝德天皇白雉五年甲寅正月、衆鼠從ニ難波ニ遷ニ倭國ニ

是遷都之瑞也などあり。

火鼠

火鼠は倭名鈔に火鼠比禰須三、竹取物語に「ひねずみの裘といふなるものを買ひておこせよ」などと見え、典籍便覽に、南荒之外、有火山、晝夜火燼、火中ノ鼠重百斤、毛長二尺、細如絲、可以作布、時出外、以水逐而沃之乃死、取緯其毛織爲西域火浣布、事物紺珠に、火鼠出炎山國、山皆火、然鼠生其中、毛長二尺、可爲布、入火不焚、俗謂火浣布（本草啓蒙卷四十七）とある。

鼠の原義

漢字「鼠」は象形字の中でも特にその要點を詳細に畫いたものであるだけに、全くその發音と緣がないから、これだけでは、その語原に到達すべき途がない。名を伏するに寄す、因て書呂切と呼ぶといふ說（說文部首訂）は鼠を竄伏の義と解してゐるのであるが、これは竄の字の義を鼠字からこそ導くべきであつて、鼠字の解釋とはならぬ。(1)源平盛衰記に、毛ジュウとは鼠の

鼠の唐名
毛ジュウ

耗蟲、耗子

唐名也とあり、正字通に俗稱鼠爲耗蟲と見え、朝鮮の訓蒙字會に鼠俗呼耗子とあるなどは、耗の音莫報切によると、マウスとなるから、ラテン語 mus 英語 mouse などと同じく、梵語 musha に關係ありと考へられぬでもない。

(1) 源平盛衰記第一叙覽あれば、實に小さき鳥也、何鳥と云ふ事を不知食、癖物なりとて、有御評定、よく〳〵見れば毛ジュウなり、毛ジュウとは鼠の唐名也、加樣の者までも皇居に懸念をなしけるにや、博士召せとて、召されたり、占申けるは、此事漢家本朝に希也、但し垂仁天皇三年二月二日毛ジュウ皇居に其變をなす、武者所蒙仰とらんとしけるに、不取得して、門外に飛出ぬ。

ねずみの語原
新井白石說
貝原益軒說

國語ネズミの語原に就いては、白石の(1)東雅には、大己貴神の神話により、ネは根ノ堅洲國などいふ幽陰の所、スミは栖にて、その穴居するよりの名とし、益軒の(2)日本釋名には鼠はヌスミなりと說いてゐる。

(1) 東雅　鼠、ネズミ義未詳、大己貴神素戔烏神のまします根堅洲國に參りたまひしを、其大神鳴鏑を大野の中に射入れて、其矢を採らしめ、卽ち火をもて其野を廻らし燒きたまひしに、鼠來りて敎へまゐらせしまま、其處を蹈み落して隱れ入り給ひし間に、火は燒け過ぎにけりといふこと、舊事古事記に見ゆ云々、さらばネスミといふネは猶根ノ堅津國などいふ如く、幽隱の所をさす也、スミとは栖也、其穴居するを云ひしなるべし、古語にネといひしに幽陰の義あるなり、草木の根をネ、寢をネといふが如し、或人の說にネスミとはヌスミの轉語也といふなり、大朴の世の如きも、旣に鼠竊などいふこともありしにこそ。

(2) 日本釋名中獸　鼠、ぬすみ也、「ぬ」と「ね」と相通ず、ぬすみするけものなり。

梵語、蒙古語いづれも鼠に盜の義あり

漢書五行志にも鼠盜竊ノ小蟲といひ、[1]梵語 mûsha は「鼠」+「盜賊」、mûs-haka は「小鼠」、「盜賊」の兩義を備へ、蒙古語 hulugana 鼠)、hulugaho (盜む)などの實例を考慮に入れると、國語ネズミ(鼠)がヌスミ(盜)と同一語根の語であることは疑ふべき餘地がない。

(1) mushka, a little mouse; a thief.
mûsh, stealer; a mouse. (M. Monier Williams, A Sanskrit-English Dictionary)

梵語雜名　鼠母蔗迦(モシヤキヤ)　もむか

東雅に「ヌスミなどいふ語の鼠に因りて云ひしなるべけれど、心得がたきことなり」と、ヌスミのネズミより轉じたることを疑へり。クルーゲ(Kluge)もこれと同じく、鼠(ねずみ)と盜(ぬすみ)といづれを語原とも定め難き由をいへり。

Mûs beruht auf einer altidg Wz. mûs „stehlen", doch ebenso gut kann Wz mûs „stehlen" Ableitung von dem Nomen mûs „Maus" sein. (Kluge, Etymologisches Wörterbuch, S. 307.)

鼠の朝鮮名

朝鮮語では鼠を[1]쥐 (chui) といふ、恐らくその鳴聲を擬したものであらう。平安北道、江界地方の方言にて鼠を song-k'u といふ、小倉博士の「朝鮮語方言の研究」(上卷、三〇一頁)に、山人蔘採取者の使用する隱語なりと見えてゐるが、[2]これは女眞語引秀(sen-kûh 鼠)の遺つたものであらう、滿洲語でも

鼠の女眞名

鼠の滿洲名

鼠をゝゝゝゝ(singgeri)といふ。

(1) 訓蒙字會上卷　鼠 ゝゝ俗呼耗子又老鼠

(2) Die Sprache und Schrift der Juĕen. Wilhelm Grube. Leipzig. 1896 S. 9

歐羅巴に於ける廿日鼠

歐羅巴では廿日鼠の起原は頗る舊く、英語 mouse、ドイツ語 Maus、ラテン語 mus、ギリシア語 μῦς、梵語 mushaゝ、ペルシア語 mushゝ、ロシア語 Мышь などが共通の語根から出てゐるのを見ると、インドゲルマン民族の分離以前の時代から、周知の動物であつたことが分かるのである。

In fast allen idg. Sprachen kehrt der Name wieder, ein Beweis, dass den Indo-germanen in ihrer Urheimat das Tierchen bereits bekannt war. (Kluge, Etymologisches Wörterbuch. S. 307)

Als Hausdiebin kennt die Maus schon die voreuropäische Sprache, denn dieser Name der sich in Griechenland und Italien und an der Elbe wie am Indus wiederfindet, stammt bekanntlich von einem Verbum mit der Bedeutung „stehlen". (Hehn, Kulturpflanzen und Haustiere. S. 456)

希臘羅馬時代の鼠害

古記錄に據ると、希臘羅馬時代に於ける廿日鼠(Maus)の被害は甚大なるものがあつて、その救濟のためには、あらゆる手段を講じ、而かもなほ及ばる場合には、全村移住の止むなきこともあつたといふが、この小鼠は南部亞細亞地方から歐洲へ侵入したものだと考へられてゐる。

歐洲に於ける家鼠

然るに中世の初歐洲に於ける民族移動(Völkerwanderung)の頃になつて、更に亞細亞方面から、從來未知の嚙齒目獸(Nagetier)で、貪食飽くことを知らない家鼠(Hausratte, mus rattus)のために襲はれて、廚房と穀倉を荒されるに至つた。ラテン語 ratus、英語 rat、フランス語 rat、イタリア語 ratto などの起原はいまだ不明で、或は[1]梵語 rada(齒)、或は[2]ラテン語 rapidus(速)

Ratusの語原

と同根の語であるといひ、又[3]ドイツ語 Ratte, Ratz はその語頭のh音を失つた形で、ロシア語 крота (むぐらもち) と對比すべきものだとも考へられてゐる。Ratte は羅馬にはまだ知られてゐなかつた動物で、ベネチア (Venezianer) ではこれを pantegan と名づけた、これは pantex (太鼓腹) から出た語で、便々たるその腹から稱へたものである。

(1) Rat, a rodent quadruped. Perhaps from √Rad, to scratch; cf. Skt rada, a tooth, elephant. (Skeat, Etymological Dictionary).

(2) Nach Ascoli wäre von den romanischen Formen ital. ratto (aus lat. rapidus schnell, flink), span. ptg. rato, frz. rat auszugehen, so dass Wort und Thier aus Italien stammen. (Hehn, Kulturpflanzen und Haustiere. S. 468).

(3) Der deutsche Name Ratte, Ratz, ahd. rato, wird ein anlautendes h verloren haben und mit dem altslav. krŭtŭ, russ. krot, der Maulwurf, lit. kertus, die Spitzmaus, identisch sein. (Hehn, Kulturpflanzen und Haustiere. S. 460).

このやうに Maus と Ratte とは歐羅巴では相對立してゐる名稱であるが、亞細亞の諸國語中には Ratte に相當する語がなく、[1]歐羅巴では、スペインでも、ラテン名 mus とは別に、ラテン語 sorex から sorce (フランス語 souris) を派生してゐる。

(1) Schott, Über einige Tiernamen. S. 6

歐洲に於ける溝鼠

歐洲に於ける家鼠の跳梁は中世の終には根絶し、これに代るに更に怖るべき溝鼠 (Wanderratte, mus decumanus) の侵入を見るに至つた。即ち一七二七年の秋、裏海地方に大地震のあつた際に、溝鼠の大群がウォルガ (Volga) の下流を横ぎつて前進を繼續し、ロシア、オーストリア、ドイツから西部歐羅巴を席卷し、パリ、ロンドンを占領して、遂に船便により大西洋

を横斷して、亞米利加大陸に到達するに至つたのである。

鼠創病

最後に附記すべきは、「鼠」の字はこれを假借して鼠病の義に用ひることで、また別に(1)「痕」の字をも作る。淮南子、說山訓、狸頭愈ヤシ鼠、雞頭已レム瘻の注に、鼠齧人創狸愈之。瘻ハ頭ノ腫疾、雞頭ハ水中芡、幽州謂ニ之鴈頭亦愈之とある「鼠」は今の鼠創病であるが、(2)瘻は鼠瘻とも鼠瘡ともいひ、これは瘰癧（るゐれき）の一種である。

鼠瘻

鼠瘡

(1) 毛詩、小雅、節南山正月、念フ我獨リ兮憂心京京タリ、哀シ我小心、瘋憂以テ痒。毛傳、京京憂不去也、瘋痒皆病也。

(2) 蒙古語ほろがうしイカノ（hulugana yara 鼠の腫物の義）、滿洲語ほろがうよの（singeri yoo 鼠の腫物の義）はいづれも鼠瘡卽ち耳腺炎の一種なり。

鼠の名を人體の一部に應用す

鼠の名を人體の一部に通用することは、各國語に多く見るところであつて、英語 muscle（筋肉）、フランス語 muscle（筋肉）の語原はラテン語 musculus（小鼠）から出でて、その匍伏して行く兒に像つた語であるが、ドイツ語(1) Maus（鼠）も腕及び足の筋肉の義に用ひ、ロシア語 Мышка は「小鼠」と「腋ノ下」、梵語 mushka は「小鼠」、「睾丸（きんたま）」の兩義があり、(2)フランス語 souris（小鼠）も鼷鼠筋の名に使用せられてゐる。これ等は、いづれも鼠害の甚しきに鑑み、鼠の活動に多くの注意を拂つた結果と見ねばならぬ。

(1) Maus eigtl. überhaupt 'Muskel an Arm und Fuss.' Auch sonst zeigt sich Übertragung des Tiernamens auf Körperteile; vgl. lat musculus „Muskel' eigtl. „Mauschen." (Kluge, Etymologisches Wörterbuch.)

(2) The remarkable change of sense in Lat. musculus from "little mouse" to "muscle" has its counterpart in Dan. mus-ling, a muscle (the fish), lit. „mouse-ling." We even find F. souris "a mouse," also, "the sinewy brawn of the arm." (Skeat, An Etymological dictionary of the English language.)

（昭和廿一年四月十一日稿）

昭和二十二年二月二十日初版印刷
昭和二十二年二月二十五日初版發行

定價七圓

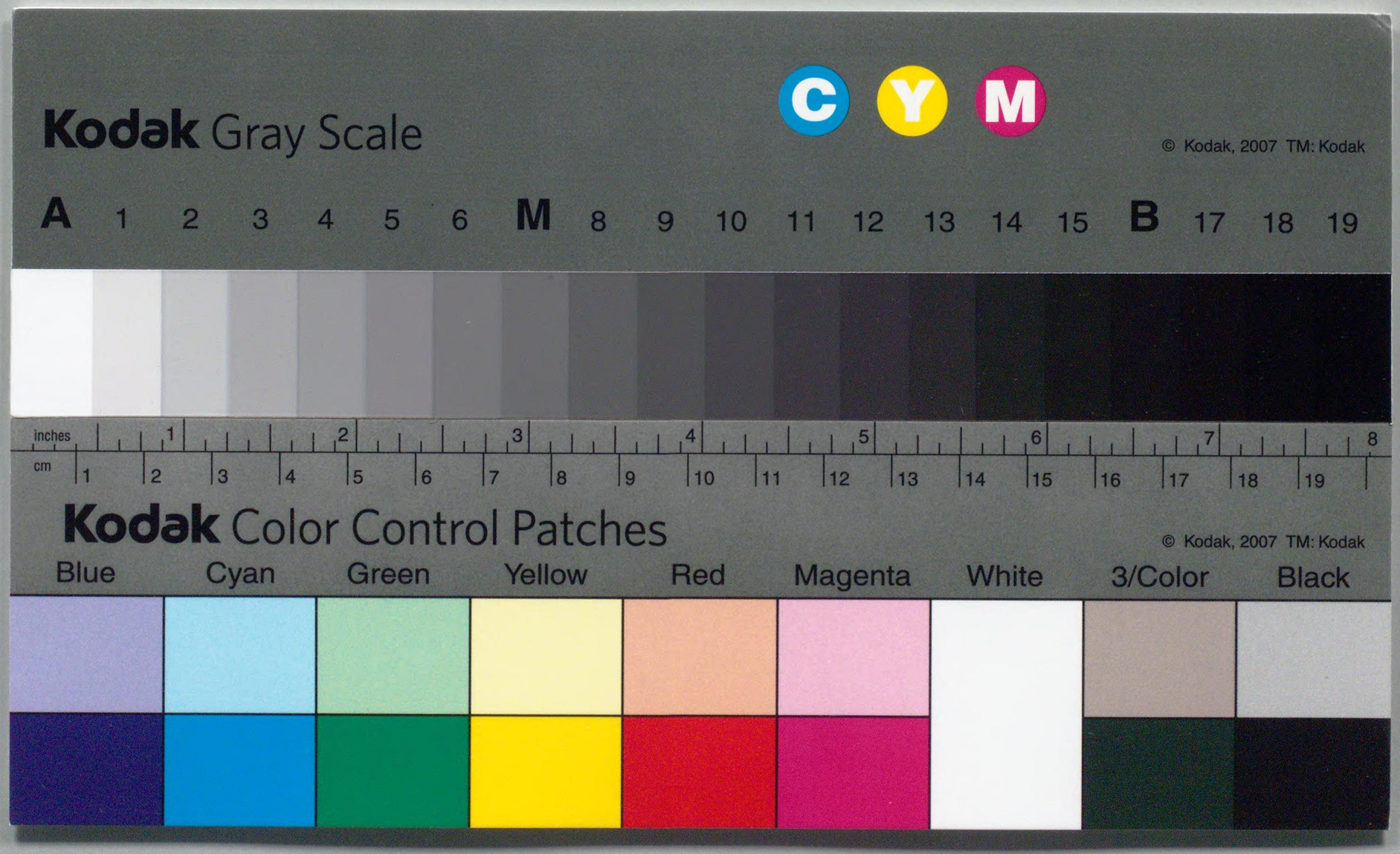
著者　金澤庄三郎
發行者　矢部良策　大阪市北區樋上町四五番地
印刷者　高橋覺吉　石川縣金澤市高岡町九〇番地
配給元　日本出版配給株式會社
版元　株式會社創元社
（會員番號一一〇〇〇三）
東京都日本橋區小舟町二ノ四
振替東京一五六五番
大阪市北區樋上町四五
振替大阪五七〇九九番

明治印刷株式會社印刷・製本

亞細亞研究叢書

1 猫と鼠
2 茶
3 鹽と味噌
4 崑崙の玉
5 雜漢字考 文と字
6 雜漢字考 六書の研究
7 雜漢字考 眼學と耳學
8 雜漢字考 類形字と反形字
9 雜漢字考 俗字と新字
10 漢字を通じて觀たる古代文化
11 支那の俗諺と迷信
12 朝鮮の國字 新羅の片假名
13 諺文の研究
14 朝鮮の萬葉假名 史道の研究
15 亞細亞研究に關する文獻
16 中歷の研究 大江匡房とマレー語
17 萬葉集雜考 湖ノ字を「みなと」と訓むことに就きて
18 日鮮滿蒙 比較言語學
19 倭名鈔の研究
20 地名の研究

（以下續刊）


Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black